童話の部 大賞 2023

第40回 日産 童話と絵本のグランプリ

今日にかぎって

樺島 ざくろ

かぎがない！　気がついたのは、五時半の夕やけチャイムが聞こえたあとだ。

そろそろ帰らなくっちゃ。そう思ってズボンの右ポケットに手をつっこむと、からっぽだった。あれ？　たしかにここに、自転車のかぎを入れたのに。左ポケットも、おしりのポケットも調べたけれど、やっぱりない。胸がドキン！と、ひとつ鳴る。

ええっと、おちついて思い出そう。通りすがりにウッチーと、この公園を発見して、それで自転車を止めたんだよな。まずはアスレチック、それからターザンロープで遊んで、最後にジャングルジムに登ったんだっけ。

順番通りに公園をまわって探したけれど、かぎはどこにも見あたらない。どうしよう。ジャングルジムのてっぺんで、ぼくの胸はドキドキ点めつしはじめた。

公園にいた子はみんな、ぼくを残して帰っていく。今日にかぎってウッチーのやつ、先に帰ったからなぁ。ぼくは口をとがらせた。

ウッチーのケータイが鳴ったのは五時前だ。

「ナベごめん。おれ、用事があるのを忘れてた！　お母さん怒ってるから帰らなきゃ」

そう言ってあわてて帰るウッチーを見送って、ぼくはひとりで公園に残った。

ちょっと遠くの知らない公園を探検するのが、最近のぼくらの流行だった。となり町の団地の中のこの公園は、今日のほりだし物だ。広くて、おもしろい遊具がそろっていて、ぼくらはすっかり気に入った。なにより、クラスの子がだーれもいないのがいい。

いじめられてるわけじゃないけどさ、ぼくらみたいな運動ぎらいな子にとって、新しいクラスは、少しいごこちが悪かった。だって、スポーツ好きな子が多いクラスだったから。なかでも苦手なのが、松田くんと山本くんだ。ふたりとも運動神経がばつぐんで、体育の授業や休み時間の遊びでも本気で勝負にこだわる。同じチームになったら、足手まといになって、きっと文句を言われるんだろうな。

学校近くの公園では、クラスのみんながよくサッカーをする。「一緒にやんない？」って声をかけてくれるけど、ぼくたちは「いいよいいよ」ってすぐに逃げてしまうんだ。だってサッカーうまくないし。ウッチーとゲームの話とかする方が、気楽で安心するんだもん。それでなんとなくみんなをさけて、ぼくらは遠くまで探検するようになっていた。

公園の時計は五時四〇分を指している。やばい、六時までに帰らないと。そうだ、電話してお母さんにスペアキーを持ってきてもらおう。そう思いついてリュックのケータイを探すけれど、今日にかぎってどこにもない。

しまった、充電したまま忘れてきたんだ！

こんなことってある？　ぼくはぼうぜんとした。今日にかぎってかぎをなくし、今日にかぎってウッチーが帰り、今日にかぎってケータイを忘れ、そして今日にかぎって知らない遠くの公園にいるなんて。サイアクだ。

だけど、なんとかしなくちゃな。夕やけ空の下、もう一度すみからすみまで探してみる。ない。ない。ここにもない。ターザンロープの通り道もたどってみたけれど、ない。かぎはいったい、どこに消えたんだ！

時こくは五時五十五分。もう自転車を置いて帰ろうか？　でも取りにくるのがめんどうだな。しばらく考えて、ぼくは自転車を運ぶことにした。かすれた文字で渡辺と書いてある青い自転車。その荷台をひょいっと持ち上げる。これで前のタイヤは動くわけでしょ。なんとかなるんじゃない？　とにかく急ごう。

けれどいくら歩いても、目指す道は現れない。それどころか角を曲がるたびに、新しい団地が次から次へとわいてくる。なんだか、ダンジョンに迷いこんだみたい。同じ顔をした団地の中から、真実の出口を見つけ出せ！　気持ちばかりがあせる。

左手でハンドルをにぎり、右手で荷台を持ち上げていたら、うでが痛くなってきた。よいしょっと。ためしに今度はサドルを持ってみる。やっぱり重いなぁ。持ち手を何度も変え、つかれたうでをだましだまし、ぼくは歩いた。もう少し。もう少しであの通りに出るはず。そうしたら、家まですぐじゃないか。

けれどダンジョンをクリアしたはずなのに、目の前には見覚えのない大通りが広がっていた。うそでしょ？　もしかして道をまちがえた？　交差点の信号が、通せんぼするみたいに赤になる。もう無理。ゲームオーバーだ。

お母さん、きっと心配してるよね。くたくたで、うでが痛くて、おなかがすいた。今何時だろう？　だめだ、なみだが出そう。

近くのバス停には、習いごとの帰りなのか、子どもたちが笑いながら並んでいた。いいな、みんなのんきそうで。ぼくとは大ちがいだ。

「あれ、渡辺？」

急に声をかけられて、驚いて顔を上げる。バス停に、クラスの松田くんの顔が見えた。

「え、松田くん？　どうして？」

「おれスイミングの帰りでさ。渡辺こそ、どうしたの？　自転車こわれたのか？」

「ぼく道に迷って。かぎもなくなっちゃって」
「マジかよ。渡辺んちって一丁目だろ？こっからけっこう遠いぜ？」
遠いという言葉が、グサリとむねにつきささる。そうか、まだ遠いのか……。
そのとき、バスがやってきた。
「マツ、乗んないの？」
先に乗り込んだ子が松田くんに声をかける。すると松田くんは少し考えて、
「いいや、おれ乗らねー。歩いて帰るわ」
と手をふってバスを見送った。そしてびっくりしているぼくになにも言わず、勝手に自転車カゴにプールバッグを放りこむと、後ろから荷台を持ち上げた。
「道案内してやるよ。松田ナビで」
「でも」
「いいからいいから。はい、そこ右な」
おかしなことになったな。ぼくがハンドルをにぎり、後ろから松田くんが案内する。知らない町で知ってる顔に会えたのはうれしいし、助けてくれてありがたい。でも、よりによって松田くんだなんて！　せなかが緊張してしょうがない。なにを話したらいいの？
「……松田くん、重くない？　かわろうか？」
やっとの思いで声を出すと、
「めっちゃ重てえな、これ！　渡辺、どっから運んできたの？」
逆に質問された。
「団地の公園だよ。ターザンロープがあるところ。道に迷って、うろうろしてたんだ」
「それ、そうとう長い距離じゃねえか。すっげえ！　渡辺って、意外と根性あんな」
胸のまんなかが、ポッと火がついたみたいに熱くなる。うん、ぼく、長い距離を歩いてきたんだよ！　声にはならなかったけれど、ハンドルをにぎる手にぐっと力がこもる。
「あ、いいこと考えた！　よし遠回りするぞ」
遠回りなんていやだけど、しかたなくナビの通りに進むと、一けんの家の前に着いた。
「松田ですけどー！」
慣れた調子で松田くんがインターホンを鳴らす。出てきたのは、なんと山本くん！
「なんだよマツ！　と、渡辺？　えっ、ふたりでどうしたの？」
驚く山本くんに、松田くんが説明する。
「渡辺が自転車のかぎなくしてさ。山ちゃん、スケボー貸してくんない？後ろのタイヤ乗っけたら、楽に運べるかなって思って」
「なるほどねぇ。いいけど、ちょっと待てよ。こうしたら、もっといいんじゃね？」
山本くんは、スケートボードの上にスタンドロックをかけた後輪をのせると、なわとびのなわで固定してくれた。
「わっ、ありがとう！　これならひとりで帰れるかも。返すのは明日でもいいかな？」
ぼくがいうと、松田くんがツッコんだ。
「渡辺、この辺の道わかんねーだろ？家の近くまで、もう少し松田ナビやってやるよ」
すると山本くんまで、
「え、なにそれおもしろそう。おれも行く！　山本ナビも追加でー！」
なんてのってきた。
今日にかぎって、本当に変なことばかりおこる。だって今、ぼくの荷台を、松田くんと山本くんが両側から支えているのだから。
「そういえば、渡辺はなんであんなところにいたんだ？　なんか用事？」
松田くんが荷台の右側を歩きながら言った。
「ううん、公園探検。ぼく、このごろウッチーと、知らない公園を開拓してるんだ」
「へえ！　ほかにもいい公園あったか？」
左側から山本くんが、おもしろそうに口をはさむ。ぼくは、ちょっとうれしくなった。
「うん！　ハトだらけの公園とか、ロケットの遊具がある公園を見つけたよ。でも一番はローラーコースターのある公園かな。とにかく長いんだ！　二駅先の駅の近くなんだけど」
「なあ。今度連れてってよ。その公園」
「みんなで行こうぜ！　内山もいっしょにさ」
松田くんも山本くんも苦手なはずなのに。ぼくは迷わず「いいよ！」って答えていた。だってふたりにも公園を見せたくなったんだ。
気がつくと、見慣れた道が見えてきた。
「ここでいいよ。もう、うちの近くなんだ」
「そっか。じゃあ、また明日な、ナベ」
「ナベ！　バイバーイ！」
山本くんはスケボーで、松田くんはなぜかなわとびで走りとびをしながら去っていく。
「あのさあ！　ふたりとも、ありがとうね！」
思ったよりも大きい声が出た。風がほっぺたをなでていく。街灯のせいなのか、ふりかえって手をふるふたりが、まぶしく見えた。
さてと。最後の直線コースをひとりで歩く。帰ったら、怒られるのは確定だな。でも、今日にかぎってはこわくない。「遅くなってごめん！」ってあやまったあとに、話したいことがたくさんあるからね。
げんかんで呼吸を整えると、ぼくは「ただいまー！」と、元気よくドアを開けた。

樺島 ざくろ
主婦　東京都

受賞のことば

頭の中に物語の切れっ端が飛んでくることがありました。でも忙しくて、立ち止まりませんでした。このままだと、切れっ端は誰にも知られず消えていくのだな。あるときふと悲しくなりました。そんなのだめだ。大切なものなんだ。私はいま、切れっ端を集めて繋いでいます。誰かにぴったりの物語が作れますように。頂いた賞を励みに書き歩んでいきたいです。

受賞歴　第39回 日産 童話と絵本のグランプリ 佳作

審査員コメント

友だち関係は、子どもの心を占める大きな問題です。自転車の鍵をなくしたことが、友だちとの新しいつながりを生み、お互いの理解を深めるようすが巧みに描かれています。疑問符や感嘆符が多いのが気になりますが、文章も読みやすかったです。

吉橋 通夫